氏名（本籍）	小林　麻衣子（神奈川県）
学位の種類	博士（社会福祉学）
学位番号	甲第１０４号
学位授与の日付	２０２６年９月１５日
学位授与の要件	学位規則第５条第１項の規定該当
学位論文題目	知的障害者の意思決定支援における「スパイラル関係性モデル」に関する研究 －相談支援専門員のエンパワメントに基づく意思決定支援プロセスに着目して－
研究審査委員	主　査　　木全　和巳　日本福祉大学　教授 副　査　　保正　友子　日本福祉大学　教授 〃　　野尻　紀恵　日本福祉大学　教授 学外審査委員　隅河内　司　田園調布学園大学 人間福祉学部客員教授

論文内容の要旨

本研究は、相談支援専門員による知的障害者の意思決定支援を、本人・親・支援者の関係性の視点から理論化し、関係性の変容によって生じる局面と特徴を明らかにすることを目的としている。さらに、その知見を基盤として「スパイラル関係性モデル」を構築し、相談支援専門員が関係性の変容にどのように関与し、意思決定支援を展開しているかを理論的に位置づけ、その実践的意義を示すことにある。

研究方法は、先行研究レビューにおける概念分析等を通じて、「スパイラル関係性モデル」を理論生成し、その後、本人・親・相談支援専門員への半構造化インタビューと三者同席のグループインタビューを実施し、質的データ分析法とエピソード記述法を用いて語りを分析し、「スパイラル関係性モデル」との照合・考察を行っている。なお、総頁数は 202 頁、図 12 点、表 19 点、引用参考文献は 195 点であった。

本論文は、理論編と照合・展開編を含む全 10 章（序章と終章を含む）で構成されている。序章では、問題意識、本論文の目的、構成、研究方法等を述べている。第 1 章で関係性に基づく意思決定支援プロセスの理論的基盤を提示し、第 2 章で相談支援専門員の役割と課題を整理している。第 3 章では親子関係支援の構造的理解とその展開可能性を示し、第 4 章で「スパイラル関係性モデル」を生成している。第 5 章から第 8 章では、本人・親・相談支援専門員の語りと三者同席場面を分析し、照合・考察を通じてモデルを検討している。終章では、相談支援専門員の役割を踏まえ、「スパイラル関係性モデル」の総合的考察を行い、結論とともに本研究の意義・限界・今後の課題を整理されている。

各章の概要は、以下の通りである。

序章：問題意識・研究の目的と方法

知的障害者の意思決定支援に関する先行研究を整理し、意思決定支援の実践的研究では本人の能力や意思表出に焦点を当てた研究が蓄積されてきたことを確認している。従来の研究は意思決定支援プロセスを段階的・直線的に捉える傾向が強く、関係性が時間とともに変化し、複数の関係性が重なり合って同時に作用する複雑さを理論的に説明する枠組みは十分に確立されていないことを指摘している。こうした課題を踏まえ、本研究は関係性中心の視座から意思決定支援プロセスを理論化する必要性を明確化している。

第 1 章：関係性に基づく意思決定支援プロセスの理論的基盤

問題意識を踏まえ、従来の意思決定支援プロセスの課題を整理し、意思決定支援プロセスを関係性中心の視座へ転換する立場を明確化している。本研究では、エンパワメント理論を主要な理論基盤、フィギュレーション理論を補完的視座として位置づけ、関係性の変容を捉える視座を提示している。さらに、支援実践の時間軸としてのソーシャルワーク・プロセス、本人の内面変容の時間軸としての意思決定支援プロセス、およびミクロ・メゾ・マクロから成る関係性の動態的作用空間を整理し、本研究で提案する「スパイラル関係性モデル」がその作用空間に位置づくことを示している。そのうえで、先行研究レビューと質的分析を踏まえ、意思決定支援プロセスの試論として、「意思の芽生え」「意思の醸成」「意思の揺らぎ」「意思の表出」「意思の交錯」「意思の実現」の 6 カテゴリーを提示している。

第 2 章：相談支援専門員の役割と課題 ―関係性の視点から―

制度の変遷と相談支援専門員の役割を整理し、法定研修における意思決定支援の位置づけを検討している。うえで、関係性の視点から先行研究をレビューし、実践課題を抽出している。その結果、課題は本人と相談支援専門員の相互作用にとどまらず、家族や関係機関との協働、制度・資源との接続といった複数の関係性に依拠していることが明らかにしている。これをソーシャルワークにおけるミクロ・メゾ・マクロの構造で整理し、本人中心性を担保しつつ関係性を調整する視座の必要性を提示している。

第 3 章：知的障害者の親子関係支援の構造的理解と展開

成人期以降も親元で生活する知的障害者が多く、親の意向が本人の意思の醸成に影響する現状を踏まえ、親子関係支援を構造的に理解している。Rodgers の概念分析により親子関係支援における複数の対比構造を整理している。その結果、関係性のバランスが意思決定支援を左右し、支援者の介入により関係性が生成・変容・再編しうることを示している。さらに、これらの知見を、第 4 章の「スパイラル関係性モデル」の理論生成の基盤としている。

第 4 章：関係性の動態と局面の特徴 ―「スパイラル関係性モデル」理論生成―

本人・親・支援者の三者関係に着目し、「スパイラル関係性モデル」を理論生成している。第 3 章で抽出している。対比構造をもとに、関係性の特徴を二軸で類型化し、誘導・適応・対立・協働の 4 つの関係性レイヤーを導出するとともに、意思決定支援プロセス（試論）の 6 カテゴリーとの対応関係を整理している。さらに、「意思の醸成」と「意思の表出」の各レイヤーを横断するプロセスとして位置づけ、本人・親・支援者の関係性が生成・変容・再編される意思決定支援の動態的構造を理論化している。

第 5 章：本人の語りにみる意思の醸成プロセス

軽度知的障害者が住まいや働く場など重要な選択を行う際に、意思がどのように醸成されるかを本人の語りに基づき検討している。分析の結果、意思の醸成プロセスは、四つの局面（支援非意識／関係性影響下／葛藤表出／協働安定）として整理された。語りからは、内発的動機に加え、意思の醸成と表出が関係性の影響を受けながら非線形に展開する特徴が確認されている。相談支援専門員は、安心して語れる場づくりや体験機会の提供、親との調整を通じて本人の意思表出を支えている。本人・親・支援者間の関係性を再編する支援の重要性が示され、「スパイラル関係性モデル」との整合性が認められている。

第 6 章：親の語りにみる意思決定支援プロセス

親の語りを、エンパワメント理論の視点に加え、家族エンパワメント理論の枠組みも用いて分析し、親の認識変容のプロセスを検討している。相談支援専門員の関与は親の価値観を相対化し、本人の意思尊重への移行を促すことが確認されている。親が保護的関与から協働的関係へ移行する過程において、相談支援専門員は関係性の再編を支える役割を果たしている。意思決定支援は、本人の主体性、親の変容、相談支援専門員の調整が相互作用する動態的プロセスであると示され、「スパイラル関係性モデル」との整合性が認められている。

第 7 章：相談支援専門員の語りにみる意思決定支援プロセス

相談支援専門員の語りを、エンパワメント理論の視点から分析し、介入構造と役割を検討している。分析の結果、意思決定支援は、関係性の揺れや再編を伴う動態的プロセスであることが確認され、「スパイラル関係性モデル」と整合性が認められている。さらに、相談支援専門員は、経験の価値化、小さな合意形成、条件再編シフトを通じて「協働変容的役割」を果たしている。

第 8 章：三者同席の語りにおける意思決定支援プロセスの動態

三者同席場面における語りを、エピソード記述法およびメタ意味の視点から分析し、発話内容と非言語的応答にみられる関係性の変容を可視化している。その結果、誘導・適応・対立・協働の各レイヤーは固定的に現れるのではなく、重なり合いながら動態的に変容することが確認されている。また、「スパイラル関係性モデル」との照合により、意思の醸成と表出が関係性の変容と相互に影響しながら展開する構造が確認されている。さらに、相談支援専門員の協働変容的役割が、関係性の調整と再編を支える機能を果たしていたことを明らかにしている。

終章：「スパイラル関係性モデル」の総合的考察

本研究は、知的障害者の意思決定支援を、本人・親・支援者の関係性が生成・変容・再編される動態的プロセスとして捉え、「スパイラル関係性モデル」（最終モデル）を提示している。各章の分析結果との照合・考察を通じて、関係性レイヤーは固定的ではなく、複数の特徴が重なりながら現れることが確認されている。また、第 4 章で生成している。理論モデルでは十分に捉えきれていなかった関係性の複層性・同時性が新たに明らかとなり、最終モデルではその動態的構造をより精緻化している。さらに、相談支援専門員の協働変容的役割とモデルの実践的活用可能性を示している。

論文審査結果の要旨

１．審査経過

2026 年 7 月 9 日の大学院福祉社会開発研究科社会福祉学専攻会議において小林麻衣子氏の審査請求論文が受理され、木全和巳、保正友子、野尻紀恵の 3 名による審査委員会が設置された。また、学外審査委員に隅河内司氏（田園調布学園大学客員教授）を学外審査委員とすることが決まった。学内審査委員は、それぞれに提出論文を精査したうえで 2026 年 7 月 30 日 18 時 30 分より審査委員会を行い、本論文の概括的評価と論点について意見交換した。引き続き小林氏への最終試験（口頭試問及び英語力審査）を実施した。終了後、最終試験の結果について審議するとともに、学外審査委員からの審査報告書（2026 年 8 月 8 日付）を総合して協議のうえ、本論文は博士学位（社会福祉学）授与にふさわしいとの結論に達した。

２．論文の評価

上記の論文内容の要旨を踏まえ、小林氏の論文の研究の意義は、意思決定支援を個人要因や直線的段階論に還元する見方を超え、本人・親・相談支援専門員の関係性における意思決定支援の動態性を理論化しているところにある。「スパイラル関係性モデル」を構築し、関係性レイヤーと「意思の醸成・表出」の相互作用を統合した理論枠組みとして位置づけている。語りと非言語要素を含む分析を通じて、関係性レイヤーを捉える着眼点と、相談支援専門員の「協働変容的役割」を明確化にしている。

限界としては、語りによる意思表出が可能な当事者を対象とした分析であり、重度知的障害者や語りが困難な事例への適用には検討の余地がある点である．また、ミクロ・メゾ・マクロの視点から検討を行ったものの、制度・地域資源・家族規範などの構造的要因が関係性に及ぼす影響経路について

は十分に解明できてはいない。

本論文の評価すべき点として、以下を挙げることができる。

第１の評価点は、意思決定支援を固定的・直線的な支援プロセスとしてではなく、関係性の変化を伴う動態的なプロセスとして捉え直した点に特色があるオリジナリティのある論文になっていることである。

第２の評価点は、この複雑性を理論的に把握するため、「誘導」「適応」「対立」「協働」という関係性レイヤーと，「意思の醸成・表出」との相互作用を統合した「スパイラル関係性モデル」を提示した点に独創性が認められることである。

第３の評価点は、従来の研究は、聴き取りの対象も「親」や「支援者」を対象にしたものが多く、偏りがあった。氏の研究は、ここに本人の視点を位置付けて、三者関係を対象として研究を深化させていったことである。

第４の評価点は、理論、実践実証、理論の再構成という循環統合モデルの方法を用いていることである。

審査委員からは、第一次審査で指摘した点は適切に修正されており、改善が確認できたこと、図が整理され、全体として非常に分かりやすくなったこと、論文全体が非常にすっきり整理され、論文全体のバランスが良くなり、論文としての完成度が高まったこと、三者関係を明らかにした点は本研究の強みであり、今後は他の関係者も含めた研究へ展開する可能性もあること、このモデルを用いた量的研究へ発展とともに、さらなる実践や研修の検証、質的研究の積み重ねにも大きな価値があることと、助言とともに評価をされた。

最後に、学外審査委員の隅河内司氏からは、「意思決定支援プロセスの本質を「関係性の動態」として捉え、理論・実証・実践を往還させながら、従来の枠組みでは捉えきれなかった複雑性を学術的に描き出している。支援者の専門性、家族の役割，本人の意思の醸成・表出を統合し、「スパイラル関係性モデル」を提示した点は、知的障害者の意思決定支援研究における重要な前進である。章構成の一貫性、方法論の丁寧さ、倫理的配慮、分析の深度のいずれも、博士論文として十分な水準に達している」評価をされた。そして、「これまで明らかにされてこなかった新規性、的確な研究方法を用いた上で科学的な分析によって新たな事実を発見した点、解決に向けた先駆的な提起、今後の研究の発展可能性という総合的な観点から、学位を授与されるに値する」との論文評価が得られたことを付しておく。

３．最終試験（学力の確認）の結果

2026 年 7 月 30 日、小林麻衣子氏の最終試験（口頭試問および英語力審査）を実施した。はじめ氏が事前に用意した説明用資料を配布し、第１次提出および公開発表会後に指摘を受けて修正した箇所（①図のわかりやすい修正、②註の補充、③モデルの当てはめと誤読されない記述の修正など）とともに、本論文で独自に明らかにした点や研究の意義についての説明がなされた。続いて、前項で述べた課題を中心に、審査委員による試問を実施した。一つひとつの指摘に対して、本論文において到達できている部分と残された課題を整理した上で真摯に応答した。具体化するための新たな実践的、理論的な検討については、氏の今後の研究に期待することで審査委員会の意見は一致した。

最後に、学力の確認として英語力の審査を行った。本研究に関連する Lorraine Gutierrez（1977）らの Empowerment in Social Work Practice の一部を直前に配布し、指示した部分について、英文の読み上げとその日本語訳を求めたところ、適切に応答がなされた。

４．結論

本審査委員会は、学位申請者　小林麻衣子氏は日本福祉大学学位規則第 12 条により博士学位（社

会福祉学）を受けるにふさわしい者と判断し、合格と判定する。

以上